東京音楽大学リポジトリ
Tokyo College of Music Repository

# 「池野成自筆譜コレクション」について



| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2019-06-05<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 鳥海, 高広, Toriumi, Takahiro<br>メールアドレス:<br>所属: |
|---|---|
| URL | https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1273 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

# 「池野成自筆譜コレクション」について

日本データベース株式会社
鳥海 高広

## 寄贈の経緯

作曲家、池野成[1]先生の自筆譜と原稿が、東京音楽大学付属図書館に寄贈されました。池野氏は、作曲家としての仕事の他に、東京藝術大学や東京音楽大学作曲科非常勤講師として作曲及び管弦楽法の指導を通じて多くの弟子を育てました。また、東京音楽大学付属民族音楽研究所（以後民音研）で伊福部昭[2]先生の下、研究員としても活動されました。

一連の寄贈は、大きく3回に分けて行われました。

池野氏が2004年に亡くなった後、自宅を壊すことになりました。ご自身は生前、楽譜は捨ててしまってかまわない、と親友で作曲家の今井重幸[3]先生に言っていたそうですが、今井氏の判断で池野氏の自宅から自筆譜を運び出すことにしました（民音研の甲田潤[4]先生談）。今井氏の指示の下、純音楽と原稿に関しては今井氏が引き取り、映画音楽については甲田氏が持ち帰り、民音研で保管されることになりました。今井氏は、甲田氏に託す際に「後々の人の役に立つように活用して欲しい」と言ったそうです。2006年に、今井氏と池野氏の長男で著作権継承者の池野礁氏との間で交わされた委任状には、「池野成の映画音楽作品の手書き総譜の総てを、東京音楽大学・民俗［ママ］音楽研究所にその保管を委託する」という文言があり、そのまましばらく映画音楽の楽譜は、民音研で保管されました。

その映画音楽の楽譜が、2013年に2月6日にご遺族の了承を得て民音研から図書館に搬入され、正式に寄贈されることになりました。これが最初の寄贈になります。

続いて、2013年8月に民音研保管の残りの映画音楽自筆譜が図書館に移された。これが2回目の寄贈です。

---

[1] 池野成（いけのせい 1931-2004）。作曲家、教育者。元東京音楽大学作曲科非常勤講師。東京藝術大学で池内友次郎氏、伊福部昭氏に師事。

[2] 伊福部昭（いふくべあきら 1914-2006）。作曲家、教育者。元東京音楽大学作曲科教授。東京音楽大学では学長も務めた。

[3] 今井重幸（いまいしげゆき 1933-2014）。日本の現代音楽作曲家、舞台演出家、構成作家。別名にまんじ敏幸（まんじとしゆき）、島敏幸（しまとしゆき）。池野先生の紹介で伊福部昭氏に師事した。

[4] 甲田潤（こうだじゅん 1957-）。作曲家、教育者。東京音楽大学付属民族音楽研究所専任研究員。

さらに、2014 年 1 月に今井氏が亡くなり、奥平一[5]氏が今井氏の資料と著作権を継承されました。奥平氏とは、東京音楽大学付属図書館ニッポニカ・アーカイヴを通じて図書館と交流があり、今井氏の自筆譜及び所蔵資料の一部の寄贈を図書館が受けることになりました。その関係で、今井氏が所蔵していた、池野氏の純音楽作品の自筆譜と、池野氏が生前書きためていた原稿が、ご遺族の了承を得て 2016 年中に図書館に寄贈されました。

こうした経緯を経て、池野氏の自筆譜等が、東京音楽大学付属図書館に保存されることになりました。

## 資料の概要

資料の大半は、池野氏自ら作曲し書かれた自筆譜です。一部他の人の作品の自筆譜もありますが、これらは生徒の作品か、または池野氏が預かっていた作品の可能性もあります。その他に、自筆譜のコピー、演奏用のパート譜、出版譜などがあります。

映画音楽に関しては、スケッチが残されていることは少なく、ほとんどが清書された楽譜で、若干スケッチらしきものが残っています。

2016 年に寄贈された資料は、ほとんどが芸術作品と池野氏が生前書きためていた「管弦楽法」についての原稿です[6]。その他には、映画音楽の自筆譜、今井氏が「池野成メモリアル・コンサート」[7]のために編曲した『映画的交響組曲第 1 番』の元になった池野氏の映画音楽のコピー譜、芸術作品のパート譜などが含まれていました。

純音楽作品のうち『Rapsodia concertante』[8]に関しては、スケッチやその前段階と思われるノートが残っています。『Timpanata』のスケッチも残っています。その他の作品に関しては、清書された楽譜がほとんどで、スケッチなどはあまり残っていません[9]。

---

[5] 奥平一（おくだいらはじめ）。芥川也寸志メモリアル オーケストラ・ニッポニカ運営顧問。

[6] 2004 年 9 月 26 日に「池野成ご夫妻を偲ぶ会」で今井重幸先生が言及した「スペインで依嘱されて書き続けて居た、スペイン語の管弦楽法概論は、日本語に戻してでも、そして、東京芸術大学と東京音楽大学での、膨大で緻密なオーケストレーションの講義ノートを加味して完結し、出版して日の目を見せて上げたいと思う」と言っていた原稿の可能性がありますが、スペイン語の原稿は見つかっていません。当日今井が語った原稿資料は、非公開です。

[7] 2006 年 11 月 23 日に第一生命ホールで開催された。

[8] 1983 年 10 月 23 日、NHK「現代の音楽」において、磯恒男の独奏ヴァイオリン、山岡茂雄指揮の東京フィルハーモニー交響楽団によって放送初演された。

[9] スケッチやノートに関しては、充分な調査がされているわけではないので、今後他の作品のスケッチやノートが見つかる可能性があります。

原稿は手書きのもので、「管弦楽法」について書かれたもののようです。授業の資料として作成したのか、一つの著作としてまとめようと考えていらしたのかはわかりません[10]。

**内訳**

| | | | |
|---|---|---|---|
| 手稿譜 | | | **726** |
| | 自筆譜 (スコア) | **587** | |
| | 自筆譜 (スケッチ) | **72** | |
| | 自筆譜 (パート譜) | **3** | |
| | 自筆譜 (自作以外) | **5** | |
| | 演奏用パート譜 | **49** | |
| | 手書き原稿 (作品関連メモ) | **9** | |
| | 進行表 | **1** | |
| 印刷譜 | | | **24** |
| | 自筆譜 (スコア) | **1** | |
| | 出版譜 | **23** | |
| コピー | | | **136** |
| | 自筆譜のコピー | **42** | |
| | 自筆譜のコピー (自作以外) | **5** | |
| | 出版譜のコピー | **18** | |
| | 演奏用パート譜のコピー | **65** | |
| | 手書き原稿のコピー | **5** | |
| | 書籍のコピー | **1** | |
| 原稿・紙 | | | **60** |
| | 手書き原稿 (管弦楽法) | **52** | |
| | 白紙五線紙 | **7** | |
| | 五線紙以外の白紙 | **1** | |
| 池内友次郎の色紙 | | | **1** |
| 計 | | | **947** |

(2017年3月末現在)

[10] 注 6 参照。

## 資料整理

映画音楽に関しては、多くは保管状態が悪く、劣化が進んだ状態でした。水濡れによってページがくっついてしまった楽譜や、虫食いや腐食によって一部分が欠損した楽譜もありました。比較的大きなサイズの楽譜の多くが、このような状態になっていました。これらの楽譜に関しては、現状保存を心がけ、同じ曲だと思われる資料ごとに紙に包み、なるべく動かさないように保存することにしました。無理に剥がしたり、欠損箇所を補ったりすることはしませんでした。このような資料については、専門業者に依頼してデジタル化を行いました。自筆譜整理について豊富な経験のある明治学院大学図書館付属日本近代音楽館[11]の助言により、資料現物についてはなるべく現状のまま保管し、資料の修復などは最小限に留め保存することにしました。

資料に関する情報の入力には、柔軟に対応出来るように、「ファイルメーカー」[12]を用いました。最終的には、ファイルメーカーで整理した情報の中から抽出したデータを図書館システム「ネオシリウス」[13]に取り込むことにし、フォーマットは大学図書館等の総合目録データベース（NACSIS-CAT）[14]に合わせることにしました。

映画音楽は、タイトルが記入されていない資料が多く、一つの資料の中に、別の作品と思われるものが挟み込まれていることが多々ありました。そういった場合に、各々別々に分けて、シリアル番号を付け整理しました。

物理的な整理を優先し、確実に同じ作品と思われるもの以外は別の物理単位として整理し、あえて作品ごとにまとめることはしませんでした。作品ごとにまとめる作業については、今後、専門家による研究に委ねたいと思います。

個々の情報は、それぞれフィールドを分け、後に図書館システムに取り込めるように設計しました。

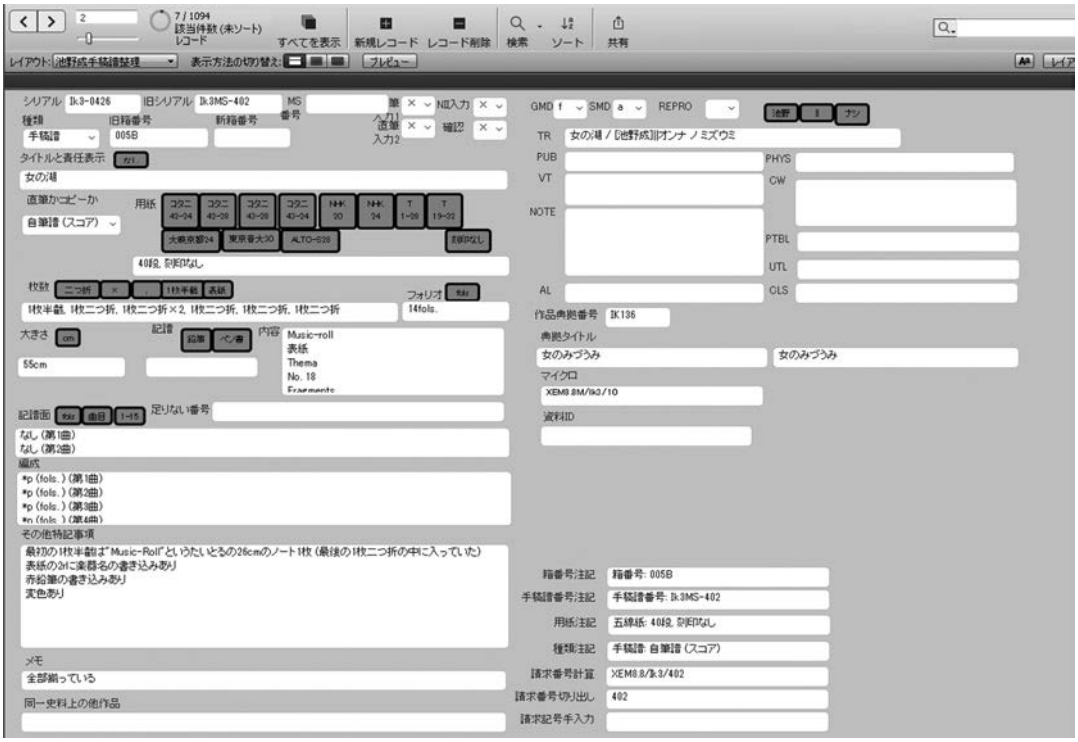
個々の楽曲は、ファイルメーカー上で細かくフィールドに分け、後に図書館システムに取り込めるように設計しました。

個々の楽曲の部分についても、個別タイトルとして、各々別のフィールドに入力し、図書館システム上の CW フィールド（内容注記）に取り込めるように設計しました。

また、「物理単位＝独立した作品」では無いため、中身の部分ごとに記述を取ることにしました。形態や記譜面、編成などは、個々の楽曲で違うため、各々独立した部分として別々に記述しました。

---

[11] 現在は「遠山一行記念明治学院大学図書館付属日本近代音楽館」。
[12] ファイルメーカー株式会社が販売するデータベースソフトウェア。
[13] 日本事務器株式会社が販売する図書館システム。
[14] 国立情報学研究所が提供する目録所在情報サービス。




ファイルメーカの入力画面

表紙も１曲としてカウントし、１曲ごとに、記譜面や編成などを記述することにしました[15]。

作品のまとまりで変わらないものはまとめて記述することにしました。五線紙は、基本的に同じものが使われているので、物理単位ごとの１つのフィールドにまとめました。同じようにペン書きが鉛筆書きかといった記譜に関するものも１つのフィールドにまとめました。これらの情報で、一部分に例外がある場合には、「その他の特記事項」というフィールドにまとめて記述することにしました。

タイトルの書き込みが無いものの中で、楽譜の片隅に監督名や配給会社の名前、略されたタイトルなどがメモされているものが多くありました。こうした楽譜も無理にタイトルとして採用せず、「その他の特記事項」というフィールドに何が書いてあるかを記述しました。メモに記入されている情報が一つしか無く、作品が特定出来そうな楽譜については、物理的な整理作業とは別に作った作品典拠のデータベースとのリンクをしました。

また、前後のつながりに関すもの（例「曲の途中からはじまっている」や「曲の途中で終わっ

[15] CW フィールドに表紙の情報も独立したフィールドとして記入したためにこのような処置にした。

ている」など)、元々あった楽譜の位置などの情報は「その他のメモ」欄に入力しました。

入力作業途中で、明らかにつながりがわかった曲は、元のシリアル番号を欠番とし、まとめることをいくつかの作品で行いました。が、基本的には、シリアルをまとめることはせず、作品典拠データベースに、関係のシリアル番号を全て記入しました。

純音楽作品は、映画音楽と違い、比較的作品ごとにまとまっていたので、整理は比較的単純に、曲の物理単位ごとに整理しました。

原稿に関しては、奥平氏の意向で、今後図書館が中心となり、公開出来ないとかと検討しています。

## 映画音楽のリスト化

池野氏は、1956 年 2 月 5 日公開、吉村公三郎監督の『嫁ぐ日』を皮切りに、商業用の映画音楽や記録映画、教育映画を合わせて全部で 210 本[16] の映画音楽を手がけました。

コレクションを紹介するパンフレット『池野成自筆譜コレクション』作成にあたり、池野氏が音楽を担当した映画等の作品をリスト化しました。出口寛泰[17] 氏作成の「池野成メモリアル・コンサート」のプログラム[18] に掲載された作成したリストを参考にし、間違えや漏れについては適宜修正し、その後に発見された作品については加筆しました。

リスト作成に関して、主に参照したサイトは以下の 4 つです。

日本映画情報システム　https://www.japanese-cinema-db.jp/

日本映画データベース　http://www.jmdb.ne.jp/

東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵映画フィルム検索システム　http://nfcd.momat.go.jp/

作曲家フィルモグラフィ [8] 池野成」短篇映画研究会 SHORTFILM RESEARCHERS http://d.hatena.ne.jp/tancho/01020108

---

[16] そのうち 1959 年の『海壁』は、小杉太一郎、原田甫、松村禎三、三木稔（いずれも伊福部昭氏に師事した）との共作。

[17] 出口寛泰（でぐちかんたい）。池野の研究を長くなさっている。池野の映画音楽をまとめた CD をご自身のレーベル「サリーダ」から発売している。　http://salida1.web.fc2.com/。

[18] 注 7 参照。

特に、短編映画研究会のサイトには、他には書かれていない情報が多数ありました。

リスト化する中で、世間に流布している情報と違うものもいくつかありました。

1961 年 7 月 9 日に公開された、五所平之助監督『雲がちぎれる時』は、データベースや販売されている DVD のパッケージには、音楽が「芥川也寸志」[19] と記述されていますが、映画内のスタッフ・クレジットには音楽が「池野成」とあります。

この件について松竹大谷図書館に問い合わせたところ、映画のプレスリリースには音楽が「芥川也寸志」と記述されていましたが、最終的な台本 [20] には音楽が「池野成」と記述されており、映画内のクレジットにも「池野成」という記述があることから、この映画の音楽は池野成と考えられるとの回答でした。また、JASRAC の作品データベース [21] にも『雲がちぎれる時』は、権利者として池野成の名前が記述されています。この作品については、プレスリリースの時点で音楽が「芥川也寸志」と発表され、その後「池野成」に変更になったのに情報が修正されないまま、DVD が発売されてしまったことが窺えます。

同様の事例が、1965 年 10 月 30 日に公開された『雲がちぎれる時』と同じ五所平之助監督作品の『恐山の女』でもみられます。各映画データベースには、音楽が「芥川也寸志」と記述されていますが、こちらも松竹大谷図書館に問い合わせたところ、「準備稿」と書かれた台本には音楽の所に「芥川也寸志」という記述があり、その後の稿と思われる台本には音楽の所が空欄、更に後のプレスリリースと完成台本には音楽の所に「池野成」と記述されているとのことです。

国立近代美術館のフィルムセンターが作成した『フィルムセンター所蔵映画目録：日本劇映画 2000』[22] は、昭和 61 年以前の作品については実際の映像を見てスタッフをリスト化しているもので、こちらにも音楽「池野成」とあります。

ただ、JASRAC のデータベースには、『恐山の女』に芥川也寸志氏の名前が権利者として書かれています。松竹の音楽出版の担当者から JASRAC へ連絡してくださったので、今後修正されることと思います。

---

[19] 芥川也寸志（あくたがわやすし）。作曲家、指揮者。伊福部昭に師事した。

[20] 松竹大谷図書館ではこちらを「完成台本」と呼んでいるそうです。

[21] 一般社団法人日本音楽著作権協会 JASRAC のサイト内「作品データベース検索サービス」。http://www2.jasrac.or.jp/eJwid/（2017 年 3 月 7 日アクセス）。

[22] 東京国立近代美術館『フィルムセンター所蔵映画目録：日本劇映画 2000』（東京国立近代美術館，2001 年）。

さらに、1959 年 2 月 24 日に公開された鈴木英夫監督作品『燈台』（東宝配給）は、文化庁のデータベースには音楽が「斎藤一郎」と書かれていますが、『東宝三十年史』[23] には、音楽「池野成」と記述されています。

また、同書には公開日が 1958 年の 11 月 23 日と記述されており、前述のものとどちらの公開日が正しいのかはわかりませんでした。今回作成したリスト上は『東宝三十年史』に倣い、1958 年 11 月 23 日としました。

映画音楽については、今後も情報を精査し、必要なところは修正して、「池野成自筆譜コレクション」のサイト [24] 内で公開していこうと思います。

## 純音楽作品の整理と調査

### 『夜の果樹園』

映画音楽が寄贈された際に、「Ballet-Suite Ballet en un acte」と題された管弦楽曲の一部分が見つかりました。

鉛筆書きで丁寧に書かれていました。楽譜の下部にページ番号が付いていたのですが、全てが揃っていたわけではありませんでした。

その後、整理を続けていると、他の楽譜の間から、同じように鉛筆書きで下部にページ番号が付された楽譜が見つかりました。それを最初に見つかった楽譜と合わせると、編成も合っているし、足りないページ部分だったために、同じ作品と判断しました。

ただ、それでも足りないページがあり、その後も色々な場所から下部にページが書き込まれた楽譜が見つかりましたが、最終的には全部が揃いませんでした。

その後、純音楽の楽譜が寄贈された時に、「Ballet-Suite Ballet en un acte」と書かれた表紙と欠けていたページの楽譜が見つかり、無事に全ての楽譜が揃いました。

楽譜の最後には、「7.00 A.M. 25. May 1953 Tokio」という作曲年が記されていましたが、作品表 [25] には、「Ballet-Suite Ballet en un acte」という曲はなく、成立年から判断して『夜の果樹園』が最も近いと考えました。そこでこの作品について調べると『夜の果樹園』は、

---

[23] 東宝株式会社『東宝三十年史』（東宝株式会社 , 1963 年）。

[24] http://tokyo-ondai-lib.jp/collection/ikeno。

[25]「池野成メモリアル・コンサート」のプログラムの作品表。注 7 参照。

1953 年 6 月 6 日に名古屋市公会堂で行われた第六回奥田敏子[26] 舞踊公演で、池野成指揮、名古屋放送管弦楽団によって初演されたものであることがわかりました。この舞踊曲を池野先生に依嘱した奥田敏子氏は既にお亡くなりになっていますが、叔父の倉知八洲土氏より、この作品や公演に関する詳細を伺うことが出来ました。

加えて倉知氏より『故・奥田敏子先生追悼』プログラムには依嘱の経緯の記述が、また倉知さんが編集された『奥田敏子 モダンダンス思考』には『夜の果樹園』の初演時の記述があることを紹介してもらいました。

『奥田敏子 モダンダンス思考』に掲載された新聞記事[27] によると、曲は 4 つの部分に分かれ、サンバのリズムがあるということが書いてあります。

実際に「Ballet-Suite Ballet en un acte」の楽譜を見ると I、II、Interlude、III という 4 つの部分に別れていて、部分的にサンバのリズムで書かれている部分がありました。

ちなみに、同じ 1953 年に初演された『作品七番』[28] を三管編成の管弦楽に編曲し『Danses concertantes』[29] として、1953 年 12 月 10 日に日比谷公会堂で行われた第 58 回東京交響楽団定期演奏会のプログラムの池野のプロフィール部分には、「バレエ組曲 1953（六月初演）」と記述されています。この「バレエ組曲」というのが、「Ballet-Suite Ballet en un acte」のことで、さらに『夜の果樹園』ではないかと考えています。池野ご自身が付けたタイトルが「バレエ組曲」であって、『夜の果樹園』というのは奥田さんが付けたタイトルということではないかと推測しています。実際、雑誌『現代舞踊』[30] からのアンケートに池野が答えた舞踊曲のリストには、「バレエ組曲」という記述は無く、『夜の果樹園』と記述されています。

そのような状況から判断して、この作品は、『夜の果樹園』ではないかと考えています。今後も調査を続け、確定したいと思っております。

---

[26] 奥田敏子さんについて、調べると、奥田さんが始めた「奥田敏子舞踊研究所」は「奥田敏子モダンダンススタジオ」、その後に「オクダ・モダンダンス・クラスター」と名前を変えて今も名古屋で存続していることがわかりました。現在は、奥田さんの叔父にあたる倉知八洲土さんが継いでおり、倉知さんに当時のことを確認したところ、奥田さんが池野に曲を依嘱し、『夜の果樹園』として初演したことがわかりました。

[27] 残念ながら新聞の詳細な出典は掲載されていません。

[28] 1953 年 11 月 5 日に日比谷公会堂で行われた「江口隆哉・宮操子舞踊公演」にて初演された。

[29] 『作品七番』が好評だったため管弦楽を二管編成から三管編成にした。

[30] 池野成「私の作曲した舞踊曲―アンケートの (1) 五十音順―」『現代舞踊』第 4 巻 3 号 (1956 年 3 月 )、10 ページ

**『ボロと宝石』**

この作品は『現代舞踊』[31] に、池野先生が作曲した舞踊曲としてタイトルが掲載されています。

初演は、近藤玲子バレエ団が旧帝国劇場で 1954 年に行ったもので、確かに『帝国劇場 100 年のあゆみ』[32] に、1954 年 5 月 1 日に上演された記録があります [33]。そして、東宝関連のプログラム等を保管している一般財団法人映画演劇文化協会 [34] に「第五回近藤玲子バレエ団公演」のプログラムが保存されていることを確認し、閲覧しに行きました。

プログラムには、バレエ『ボロと宝石』を製作する経緯が書かれていましたが、残念ながら池野の音楽に関する具体的な記述はありませんでした。今後も引き続き調査したいと思います。

**『カリジア海』**

この作品は同じく『現代舞踊』[35] に記述されていた曲で、1955 年に石井晶子 [36] 舞踊団が初演したとありました。

同舞踊団関係者に当時のプログラムや資料もの有無を確認しましたが、残念ながら残っていませんでした。

その後、石井晶子さんについて調べる中、1956 年 1 月 28 日に産経ホールで「第一回石井晶子帰朝公演」が行われたことがわかりました [37]。1955 年に作曲された『カリジア海』は、その帰朝公演の時に初演されたのではないか？ と考え、「第一回石井晶子帰朝公演」について調べましたが、その時に呉泰次郎さん作曲の『チェックメイト』と、『マンボ X』という小品、

---

[31] 注 30 参照

[32] 『帝国劇場 100 年のあゆみ』編纂委員会，東宝株式会社総務部編『帝国劇場 100 年のあゆみ：1911-2011』東宝，2012 年

[33] 前期書に『ボロと宝石』に関する情報が記載されていることや東宝関連プログラムの保管場所については、帝國劇場に問い合わせて教えてもらいました。

[34] 東京都千代田区有楽町1丁目５－２。http://www.eibunkyo.jp/。

[35] 注 30 参照

[36] 石井晶子舞踊団は現在も横須賀で「石井晶子モダンバレエ団研究所」として活動。石井晶子（本名は菱田晶子）の妹・菱田道子さんはヴァイオリンで東京音楽学校出身、池野と同級生。菱田さん自身は『カリジア海』の詳しいことは知らないとのこと。石井さんが舞踊関係のつながりから曲を依嘱したことが推測される。

[37] それまではアメリカに留学していた。

『アニトラの踊り』が演じられたこと[38]以外のことについてはわかりませんでした。

また、『現代舞踊』掲載の作品リストに編成が5人の打楽器奏者と2台ピアノとありましたので、似たような編成があるか自筆譜を調べてみましたが、残念ながら見つかりませんでした。

この曲も引き続き調査したいと思います。

**『増殖儀礼』**

この作品は、1959年6月28日に「現代舞台藝術協會第一回公演」で初演されました。初演のプログラムがあり、池野氏のコメントも載っていたのですが、具体的にどのような編成で、どのような曲なのかはわかっていません。

この曲も引き続き調査したいと思います。

**『Tamburata』**

自筆譜の中に8人の打楽器奏者のための楽譜がありました。

現在『Tamburata』として知られている曲は、1996年6月2日に麻生文化センターで行われた「96’PERCUSSION　FESTIVAL」で百瀬和紀指揮によって初演された20人の打楽器奏者のための作品です。

池野氏がご存命だったころ、ご自宅で8人編成の『Tamburata』の楽譜を出口氏が見たことがあるということを聞いていました[39]。

インターネットで調べたところ、埼玉県立伊奈学園総合高等学校が1989年にアンサンブルコンテストの地区大会で金賞を受賞した[40]という記述がありました。コンテストを主催した埼玉県吹奏楽連盟より、当時のプログラムの複写を取り寄せました。そのプログラムによると、

---

[38]「舞踏会評　石井晶子帰朝公演」,『音楽新聞』1956年2月19日（第649号）,6面「音楽新聞附録舞踊新聞」

[39] 出口さんがその時に直接先生に事情を聞いたそうですが、曲についての詳しい経緯は答えをはぐらかされてしまったそうです。

[40]「埼玉県発！吹奏楽情報局へようこそ！」というサイトの県立伊奈学園総合高等学校のページ。http://saitama-wind.sakura.ne.jp/saitama/high/inagakuen.htm。

1989 年 11 月 17 日に上尾福祉会館中ホール[41]で行われた第 13 回埼玉県アンサンブルコンテストで埼玉県立伊奈学園総合高等学校が『Tamburata』を演奏したと書いてありました。

プログラムでは依嘱されたのか、初演なのかといった詳細がわからなかったので、埼玉県立伊奈学園総合高等学校に直接問い合わせたところ、当時の同校打楽器講師をされていた井上文子先生[42]が、池野氏に依嘱されたものであることがわかりました[43]。アンサンブルコンテストは編成や演奏時間の制約があるため、それに沿った内容の曲を新たに池野氏にお願いしたそうです。

現在知られている 20 人の打楽器奏者のための作品と比べると、８人のための曲は短く、構成も全く異なります。

今後、８人の奏者のための『Tamburata』の再演を含め、なぜ同じタイトルを持つ２つの違った編成の作品が作られたのか？ といった研究がされることを願っています。

**『Divertimento』**

池野氏が作曲した純音楽最後の作品の『Divertimento』[44]の初演について、「池野成メモリアル・コンサート」のプログラム[45]には、栃木県立宇都宮北高等学校が初演と書いてありましたが、当日演奏されたプログラムには「公式舞台初演」と記述されていました。この件について調べ、初演の経緯を確認しました。

８人編成の『Tamburata』と同じように、やはり栃木県立宇都宮北高等学校が「アンサンブルコンテスト」で演奏されたものでした。コンテストを主催した東関東吹奏楽連盟より、2001 年 1 月 21 日にひたちなか市文化会館大ホールで行われた「第 6 回関東アンサンブルコンテスト」のプログラムの複写を取り寄せました。そこに、栃木県立宇都宮北高等学校が

---

[41] 現在の上尾市文化センター。中ホールという建物があるわけではなく、大ホールの半分の座席を使用したものが中ホールだと埼玉県吹奏楽連盟の方が教えてくださいました。

[42] 井上文子先生は、長く東京立正女子高等学校で指導していたそうです。その後、様々な学校で打楽器を教えていたそうです。

[43] 井上先生は池野の『Evocation』を東京立正女子高等学校で演奏したことがあり、そのご縁で委嘱されたということを、埼玉県立伊奈学園総合高等学校吹奏楽顧問の宇畑知樹先生が教えてくださいました。

[44]『Divertimento』の自筆譜には「1997 Barcelona」と記述されている。

[45] 注 7 参照。

『Divertimento』を演奏したことが記述されていることを確認しました。

栃木県立宇都宮北高等学校吹奏楽部顧問の田村静香先生から、当時の吹奏楽部顧問岩原篤男先生を紹介していただきました。岩原先生へ池野氏から送られた手紙によると、『Divertimento』は、井上文子先生のお弟子さんが桐朋学園大学の打楽器科で試演したのみで、公開の場で演奏したことは無かったそうです。「アンサンブルコンテスト」で演奏するには、演奏時間が少し長かったため、池野氏の許可を得て、一部分をカットした形で、「第6回関東アンサンブルコンテスト」で演奏したということです[46]。

その後、カット無しで演奏されたのが、「池野成メモリアル・コンサート」ということになります。

**自筆譜のオリジナルが無い資料**

純音楽作品のうちで、池野氏の自筆譜の原本が無い作品が2017年3月の時点で3作品あります。

1つ目は、1953年11月5日に「江口隆哉・宮操子舞踊公演」で初演された『作品七番』です。この作品は上記のように、二管編成のオーケストラで書かれ、その後三管編成のオーケストラに編曲されて1953年12月10日の「第58回東京交響楽団定期演奏会」で『Danses concertantes』として初演されました。編曲された『Danses concertantes』の自筆譜の原本はあるのですが、『作品七番』の方は、コピー譜を含めて一連の寄贈資料の中には存在しません[47]。

2つ目は、1977年10月30日に「東京藝術大学創立90周年記念演奏会」で初演された『Timpanata』です。自筆譜のコピーはあるのですが、自筆譜の原本はありません。初演した有賀誠門[48]先生に聞いたのですが、先生もコピー譜しかお持ちではありませんでした。引き続き調査したいと思います。

3つ目は、1984年1月21日に「東京芸術大学トロンボーン・アンサンブル第5回定期演奏会」で初演された『古代的断章』です。この曲のコピー譜はあるのですが自筆譜の原本はあ

---

[46] 岩原先生は、井上文子先生（注42，43参照）が指導していた東京立正女子高等学校が演奏した池野の『Evocation』を聴いてから、いつかご自身の学校でも『Evocation』を演奏したかったそうです。が、『Evocation』は編成が大きく演奏時間も長いために、井上文子先生に相談したところ、池野の『Divertimento』を紹介されたそうです。

[47] 桑原和美編『江口隆哉資料目録』（東京女子体育大学，2001年）には、『作品七番』に関する音源や写真などについては載っているが楽譜に関する記述は無い。

[48] 有賀誠門（あるがまこと）。打楽器奏者。元NHK交響楽団主席奏者、東京藝術大学名誉教授。

りません。ただ、表紙付きの製本されたコピー譜の表紙に赤字で「訂正用」と書かれた楽譜があり、音符が赤ペンで修正されている楽譜があります。多分、池野氏本人が書き込んだ修正だと考えられます。自筆譜の原本をコピーした後に書き込まれたものなのか、それ以前に書き込まれたのかはわかりません。

これらの曲の自筆譜の原本も、引き続き探したいと思っています。

作品リストは、今後も修正されると思います。最新の情報は、東京音楽大学付属図書館コレクションの「池野成自筆譜コレクション」のサイト[49]に反映する予定です。

## 終わりに

「池野成自筆譜コレクション」は 2017 年度中に、東京音楽大学付属図書館の所蔵資料として運用を開始する予定です。

映画音楽の楽譜は、物理的な整理を行いましたが、内容の詳細な確認などはしていません。楽譜に書かれている作品の確定を含めて、今後の課題としたいと思っています。特に破損の激しい作品については、ほぼ情報が手つかずになっています。こちらも、出来る範囲内で整理したいと考えています。

純音楽作品については、作品の整理はおこないましたが、一部の作品の自筆譜の原本が見つかっていません。本当に残っていないのか、も含めて今後も引き続き調査していきたいと思います。

「管弦楽法」の原稿については、今後、東京音楽大学作曲科の先生方の協力が得られ、刊行に向けての具体的な検討が行われていることを期待します。

作曲家が書いた楽譜や原稿には、様々な情報が詰まっています。これらを次世代に繋ぐことは、とても大切なことだと思います。実際、今回の池野氏の寄贈を契機として、他の作曲家の作品も東京音楽大学付属図書館に寄贈されました。大学の理解の下、それらの整理も順次進められることを期待しています。

今回「池野成自筆譜コレクション」として図書館に寄贈された資料が、今後様々な形で利用されることを願っています。

---

[49] http://tokyo-ondai-lib.jp/collection/ikeno

## 参考文献


秋山　邦晴

1973 年　「日本映画音楽史を形作る人々　池野成」（隔号連載 17）『キネマ旬報』第 609 号（1973 年 7 月下旬号）（東京 : キネマ旬報社）、123-128 ページ

池野　成

1956 年　「私の作曲した舞踊曲―アンケートの（1）五十音順―」『現代舞踊』第 4 巻 3 号（1956 年 3 月）（東京 : 現代舞踊社）、10 ページ

音楽新聞附録舞踊新聞

1956 年　「舞踏会評　石井晶子帰朝公演」,『音楽新聞』（東京 : 音楽新聞社）1956 年 2 月 19 日（第 649 号）、6 面

倉知　八洲土　編

1991 年　『奥田敏子・モダンダンス思考』（名古屋 : 奥田敏子舞踊研究所）

東宝株式会社

1963 年　『東宝三十年史（東京 : 東宝株式会社）

伊豫田　静弘

2007 年　『焼け跡のカーテンコール　戦後名古屋の洋舞家たち　大切なことを忘れないうちに』　藤井　知昭　監修 , 松本　吉正　編（名古屋 : 世界劇場会議名古屋）

国立近代美術館

2001 年　『フィルムセンター所蔵映画目録 : 日本劇映画 2000』（東京 : 東京国立近代美術館）

桑原和美　編

2001 年　『江口隆哉資料目録』（東京 : 東京女子体育大学）

## インターネット

日本映画情報システム　https://www.japanese-cinema-db.jp/（2017 年 3 月 6 日アクセス）

日本映画データベース　http://www.jmdb.ne.jp/（2017 年 3 月 6 日アクセス）

東京国立近代美術館フィルムセンター所蔵映画フィルム検索システム　http://nfcd.momat.go.jp/（2017 年 3 月 6 日アクセス）

作曲家フィルモグラフィ [8] 池野成」短篇映画研究会 SHORTFILM RESEARCHERS http://d.hatena.ne.jp/tancho/01020108（2017 年 3 月 6 日アクセス）